

駒込史学が広げる間帝國的な視座の可能性 How Takeshi Komagome's historiography can widen the prospects of the trans-imperial perspective

水谷 智

MIZUTANI SATOSHI

同志社大学

Doshisha University

キーワード

間帝国 世界史 イギリス帝国 日本帝国 台湾

Keywords

trans-imperial; world history; British empire; Japanese empire; Taiwan

Quadrante, No.19, (2017), pp.77-82.

目次

はじめに

1. 「世界史」の含意
 2. 台湾植民地化の＜イギリス要因＞
 3. 文化と間帝國的な重層性
 4. 中心／周辺のダイナミズム
- おわりに

はじめに

本稿は通常の書評ではなく、評者の専門領域に照らし合わせて駒込武氏（以下、駒込）による『世界史のなかの台湾植民地支配——台南長老教中学校からの視座』（岩波書店、2015 年）のもつ可能性についてコメントすることがその目的である。評者の専門は大まかにいってイギリス帝国史および植民地研究であり、ここ数年はイギリス帝国と日本帝国を事例としてとりあげながら、同時代における異なる帝国間の関係性——私はそれを「間帝國的」(trans-imperial)なものと呼んでいる——の文脈において、植民地支配およびそれへの抵抗がどのように展開したのかに関する歴史研究に従事している。本稿では、間帝國的な視座からなされるイギリス帝国史研究および植民地研究に対して駒込の著書がもつ意味について考えてみたい。そのために、全体を包括的に論じることを避け、日本による台湾の植民地化とイギリス帝国の関係が詳

述される第 I 部に焦点を合わせて論じていく。

1. 「世界史」の含意

2016 年 3 月に東京外国語大学で行われた「書評コロキウム」は、書評会としては異例ともいえる数の聴衆を集め、日本の植民地研究において駒込が占める重要さをあらためて物語るものとなった。しかし、私にとってひとつだけ残念だったのは、討論では様々な点がとりあげられたものの、日本帝国のイギリス帝国との関係についてはほとんど議論されなかった点である。もちろん、コメンテーターとしてその点について説明した私自身の力量不足もあったかと思うが、イギリス帝国を論じる部分はこの著作の趣旨を十分に理解する上で極めて重要ではないか、また、それはイギリス帝国史研究および植民地研究全般に重要な問題提起をしているのではという考えは今もかわらない。以下、この機会を活かして再度の説明を試みたい。

駒込は本書のタイトルに「世界史」という語を用いている。定義の仕方によっては、植民地支配が「世界史」的な事象であったことは今さら言うまでもないことである。一国が遠方の他地域を支配するということがそもそも越境的事象であるし、イギリスやオランダの例に顕著にみられるように、近代帝国の領土が大洋を越えて遠隔の地におよび、文字通り地球をまたぐかたちで現地社会の統治が行われたという意味でも、植民地主義は世界史的



であった。さらに、19 世紀末から 20 世紀前半にかけての「帝国主義の時代」においては、世界が支配する側とされる側にほぼ二分され、地球上の人々のほとんどが何からのかたちでそれに巻き込まれたことから植民地主義がいかに世界史的なものだったかがわかる。しかし、駒込の「世界史」は、これまで言い尽くされてきたこれらの点に還元されてしまうような陳腐なものではない。それは、これらすべてを前提としたうえで、さらに別の意味合い、すなわち「間帝国」という意味合いを色濃く帯びている点で重要である。この著作において描かれる台湾植民地支配は、日本帝国という単一の帝国内における支配／被支配の関係性にすべてが収斂されるものではない。それは、日本帝国を中心としつつも、それを含む複数の帝国の重層的な影響関係のなかに位置づけられている。

まず本書では、19 世紀末に植民地化され始める直前まで、台湾が前近代の東アジアにおける帝國的秩序の中心であった清帝国の辺境に位置したことが確認される。その上で、清朝の近世的な覇権を切り崩しつつ、日本を含む東アジア全体に強い地政学的、文化的影響を及ぼし始めた近代帝国としてのイギリスの影響力が説明され、さらに台湾における宣教師を中心としたイギリス人の存在が歴史的に文脈化される。こうした舞台設定のもとに、はじめて 1895 年以降の日本の台湾植民地支配が論じられることになるのである。「旧帝国」としての清朝、「新帝国」を代表するイギリス、そして東アジアにおいて新たに誕生したばかりのもうひとつの新帝国としての日本という三つの帝国のくはざまに台湾を位置づけて論じることこそが本書の内容を「世界史」的なものにしているのである。

2. 台湾植民地化の＜イギリス要因＞

では、間帝国の視点から見た東アジアにおけるイギリス帝国の存在とはどのようなものであったのか。南アジアにおいてムガル帝国を、西アジアにおいてオスマン帝国を弱体化させていったように、東アジアにおいてイギリスは清朝の近世的な権勢を徐々に弱体化させていった。もっとも、南アジアのように領土化を伴う植民地化の対象にはしなかったが、「自由貿易」の名のもとにアヘン取

引を強要することで自らの帝国経済に組み込み、「非公式帝国」の一部として清朝に強い影響力を行使する立場にあった。一方、1895 年に日清戦争で日本が清朝に対して勝利を収めると、イギリスは下関条約における日本の台湾領有を特に反対することなく容認したが、このことが日本による台湾植民地支配の始まりに極めて重要な意味を持った。清朝に強い影響力を持つイギリスが日本への台湾の譲渡に対して干渉しなかったことは、前者が後者に対して自らと同じように近代的な植民地帝国になる権利を認めたとも解釈できる。

日清戦争以降、イギリスは、アフリカに続いて列強の帝国主義競争の舞台となった東アジアにおいて、日本をいわば「ジュニア・パートナー」とすることによって、自国の利益を確保する方向に舵を切った。その後の少なくとも約 10 年間、東アジアにおける清帝国周縁部の植民地化が日英の「合作」であったといっても決して過言ではないことは、駒込が論じる台湾植民地支配に続いて、朝鮮植民地支配にもイギリス帝国の存在が大きな影響を及ぼしたことからもわかる。イギリスは、1902 年に国際同盟を結んでいた日本が 1904 年の日露戦争によってロシア——フランスとならんでイギリスの帝国間競争の相手と見なされていた——を半島から排除し、朝鮮を保護国化することを歓迎した。さらに 1905 年の日英同盟改定では、イギリスはインド防衛に日本の協力をとりつける見返りに、日本が朝鮮の外交上の主権者であることを事実上認め——朝鮮側の抗議にもかかわらず、である——、そのことが半島における日本の帝国支配強化につながった。またイギリスは、植民地統治のモデルを提供したという点でも日本に影響を及ぼした。例えば、朝鮮を「東洋のエジプト」とする見方が日英双方に存在した。首相として台湾領有に深く関与し、後に保護国朝鮮の初代の統監になった伊藤博文には、イギリスによるエジプト支配の象徴ともいえるクローマー卿のようになることが期待され、伊藤自身もそれを強く自覚していた。こうしてイギリスは、植民地保有国としてのいわば「後輩」にあたる日本をうまく飼い慣らし、アジアにおける帝国主義競争を有利に進めようとした。そして、そうした間帝國的協働のスキームに日本側も積極的に参加していったのであ

る。

第Ⅰ部において駒込が描き出す「世界史」とは、19世紀末から20世紀初頭にかけての台湾の植民地化が、こうした重層的な間帝國的関係性のなかで展開されたまさにその過程にほかならない。イングランド長老教会の宣教師を中心として構成される台湾のイギリス人コミュニティは100人に満たない数的には小さなものだったが、この時代の東アジアにおけるイギリス帝国の影響力を考えると、日本による植民地化が常にイギリスの目を気にしながら行われたことは不思議なことではない。駒込によって〈イギリス要因〉が組み入れられることで、台湾における初期の植民地史が、支配者（日本人）と被支配者（台湾人）のあいだの包摂／排除をめぐる単純な二元論的に還元されえない、「世界史」的な視座を要求するものとして立ち現れることになる。清朝という旧帝国から切り離され、日英というふたつの近代帝国の〈はざま〉におかれた台湾の人々の植民地経験は、異なる帝国間の協調と対立というさらに複雑な関係性の構図の中に位置づけられるのである。

駒込は、こうした三者の関係を、台湾におけるイングランド長老教会（信者の多くはスコットランド系）から派遣された宣教師の動きを中心に据えて分析する。第Ⅰ部が扱う時代の関係性の基調として見い出されるのは、日英間の間帝國的協調である。このことは、単純に上述した東アジアにおける帝国主義競争の歴史背景を反映してのことではなかった。それには、「清朝に比べて日本帝国のほうがキリスト教的なものを含む近代文明の受容に積極的である」という宣教師ならではの状況判断が影響していたのである。また、こうしたキリスト教世界(Christendom)の拡大を優先する思考は、一部の台湾人信者の「親日的」ともいえる行動を説明するものでもあった。イギリス人宣教師と現地の信者はともに旧帝国の儒教的文化をキリスト教布教の最大の障壁とみなし、新帝国の近代的統治によるその排除と、植民地的な文明化の帰結としてのキリスト教世界の拡大に期待したのである（第Ⅱ部、第Ⅲ部で示されるように、その期待は後に裏切られることになるが）。

キリスト教の役割を間帝國的な文脈において問うことで、駒込は「ミッション研究」の新しい可

能性を提示している。自国の海外領土において活動するイギリス人の宣教師が、帝国主義の手先とも、また逆にその批判者とも単純に割り切れないことは、すでに指摘されて久しい。かれらは、自らが目指すキリスト教世界の拡大が植民地支配によって結果的に促進される限りにおいてそれを批判することなくむしろ利用したが、一方でかれらが掲げる倫理基準が植民地主義の暴力や搾取を許容しない場合はそれらを糾弾し、そのことが帝国の政治権力とのあいだに緊張関係を生みだすこともあった。一方、宣教と植民地権力をめぐるこうした複雑な関係性が、間帝國的な空間においてどのように表出するのかについては、イギリス帝国史の領域では未だ研究が進んでいない。他帝国の植民地的文脈における支配と抵抗の現場に直面したとき、宣教師はどのような選択をするのか。支配側が掲げる「文明化」を支持するのか、あるいは、植民地支配に必然的につきまとう暴力、差別、搾取を糾弾し、それらからの解放をめざす抵抗者の側につくのか、あるいはまったく中立的な立場をとるのか。さらに、こうした他帝国での植民地経験は、自らの帝国による植民地主義に対するかれらの視点とどういった関係があるのか。

こうした点を問うにあたって、教会に関する英語の一次資料にもとづいた駒込による重厚な歴史研究は、重要な先例を提供している。そこでは、在台的イギリス人宣教師たちが、日本による「文明化」に一定の期待を寄せる一方で、植民地的暴力に対してはこれを手厳しく批判したことが示される。例えば、1896年の雲林事件における日本軍による台湾原住民の虐殺に対して批判的立場をとったイギリス人宣教師のなかには、英字プレスで海外に向けて告発をした者もいた。この間帝國的な批判の文脈では、日本人による「野蛮」な行為は、日本人自身がいまだに十分に「文明化」されておらず、植民地支配の担い手として不適であることを示唆しているという論調も登場した。イギリス人の眼下に台湾統治を成功させることで、「文明国」として認められたい日本側の為政者たちにとって、このことが痛手であったことはいまでもない。一方で、日本を批判したイギリス人宣教師たちが自分たち自身の帝国による植民地支配をどう見ていたのかという問いは残る。

3. 文化と間帝國的な重層性

駒込の研究に一貫しているのは、分析対象となる支配と抵抗の場として学校教育を設定していること、そしてそのことによって、言語、宗教、感情、規律、慣習といったさまざまな主題を横断する広い意味での「文化」的な領域が論じられるということである。狭義の教育史の枠をはるかに超えながら、教育を中心として多方向に広がる文化の領域と、政治、経済、社会的な領域とがシームレスにつながった歴史像を提示してきたことが、日本植民地研究のひとつのスタンダードとして駒込の研究がこれまで参照されてきた理由であろう。前著『植民地帝国日本の文化統合』（岩波書店、1996年）では、近代帝国における文化の「統合」と、その過程で不可避免的に立ち現れる「差別」の構造を明らかにし、植民地研究の方向性に大きなインパクトを与えてきた。2015年に刊行された本書の新しい点は、文化レベルでの包摂と排除への着眼を維持しつつ、今度はそれを日本帝国内だけではなくて重層的な間帝國的な文脈のなかに位置づけて分析していることである。ともすれば外交や軍事に関する問題に偏りがちな間帝國的関係性に関する議論を、ミクロな領域を含む文化的諸相の分析をとおして行うことの意義は大きい。

駒込は、台湾領有によって日本植民地帝国が誕生する19世紀後半の東アジアを、「多様な文明観が相互に緊張をはらみながら、文明の秩序が東アジア世界に浸透していく」時空間と定義する（44頁）。第I部では、そうした文明の重層性と緊張関係を、以下の3人の人物の個人的経験をとおして論じている。ひとり、イングランド長老教会の要職にあり、日本帝国による台湾の「文明化」にキリスト教普及の可能性を託したヒュー・マカイ・マセソンである。もうひとり、そのマセソンとイギリス密航時代から親交があり、明治政府の首相として領台に深く関与した伊藤博文である。そして最後に、台湾基督長老教会内の台湾人コミュニティの重鎮で、初期の日本による植民地化への協力者として知られることになる李春生である。この3人は、旧来の秩序を否定し、近代的な「文明化」の熱烈な信者だったということで共通していた。もちろん、「近代文明」の定義においては彼らのあいだでズレが存在し、それぞれの間には潜

在的な緊張が存在した（例えば、キリスト者であるマセソンや李春生とは違い、伊藤にとっての「文明」は基本的に世俗的なものだった）。駒込の指摘で非常に興味深いのは、彼らが出自的には政治的エリートの主流からはいずれも外れていたということである。マセソンはイングランドではなくスコットランドのハイランドの家系出身、伊藤は長州藩の貧農出身、清帝国の辺境である台湾の李春生もイギリス商人との取引によって短期間で財をなしたいわば「成り上がり」の家の出であった。彼らの近代文明への強い志向性は、こうした周辺性と関係していた。彼らの例は、自らの社会で相対的に劣位の者に対して、帝国が社会上昇の機会を与える可能性があったものであったことを示している。（もちろんそれは、「被支配者」にカテゴリーされた李春生の場合には、常に排除される可能性を抱えた構造的に限られたものであったが。）

4. 中心／周辺のダイナミズム

イギリス帝国史研究者の立場からすると、マセソンについて論じるなかで駒込が連合王国におけるスコットランドの周辺性を詳述している点がとりわけ興味深い。イングランドの政治的優位にもかかわらず、イギリス帝国を単に「イングランド」的ではなく「イギリス」的なものにした一つの大きな要因は、植民地におけるスコットランド人の極めて積極的な活動——それは宣教活動にとどまらず、「自由貿易」と政治支配による「文明化」にも及んだ——であった。なぜマセソンのようなスコットランド人は帝国に活躍の場を求めたのか。駒込は、イングランドに対するハイランド出身のスコットランド人の劣等感、さらには、自分自身の「野蛮」を克服するために自己を対象としてなされた「文明化」の記憶が、19世紀末時点では遠い過去のものではなく未だに鮮明であった、という指摘をしている。間帝國的視点から見たときに重要なのは、駒込が、イギリスの「内国植民地主義」の文脈で周辺に置かれた人々のこうした文明への渴望を、日本帝国という他の帝国の植民地的支配の文脈のなかに位置づけて論じていることである。スコットランド系イギリス人と自国の海外領土とのかかわりはイギリス帝国史研究ではすでに論じられてきたが、彼らの存在が他帝国の植民

地においてどのような意味を持ちえたのかを問うにあたって、駒込の研究は極めて示唆的である。

こうして駒込によってその一例が示されたイギリス帝国内の中心／周辺のダイナミズムと間帝國的領域との連関について、今後さらに研究を進めていくのはイギリス帝国史研究者の役目であると評者は考えている。イギリス国内で周辺の位置にあった地域としては、スコットランドに加えウェールズとアイルランドがあり、それらのイングランドに対する従属性の質はそれぞれスコットランドのものとはまた異なっていた。特にアイルランドは、植民地保有国としての「本国」の一部なのか、あるいはそれ自体が植民地的な「属国」なのか、その位置は曖昧だった。一方、カナダやオーストラリアといった、イギリスの植民地から出発し、やがて自治を獲得していくことになる社会もこれとはまた異なる曖昧さをもった。例えば、イギリスからの移民に起源を持つカナダ人は一方では植民地人でありながら、他方では人種化された帝国の社会序列の頂点にある「白人」であり、従属性と支配性の両面を併せ持った。イングランド人とは違って支配／被支配の区分に曖昧に位置づけられたこうした人々は、日本帝国との間帝國的な領域とどうかかわったのか。

たとえば、駒込が論じる植民地台湾における宣教師を見た場合、南部のイングランド長老教会に対し、北部ではカナダ長老教会が活動した。さらに植民地朝鮮に目を移せば、カナダ長老教会から派遣された宣教師のなかには、イギリス国教会の宣教師とは対照的に、1919年の独立運動の際には朝鮮人を支持する側にまわることで日本政府はもちろん、イギリス政府とのあいだにも緊張関係をもたらす者が現れた。こうした間帝國的共感が、イギリス帝国内のヒエラルキーにおけるカナダの位置とどう関係していたのか、検証していく作業が必要であろう。さらに研究領域を拡大させるならば、インド人などのイギリス帝国において最も従属的な立場に置かれた非白人の植民地臣民が、いかに日本帝国の植民地的文脈と関わったのかについても今後問われるべきであろう。その内部に民族的階層性を孕む帝國的な中心としてのイギリス本国、人種的支配の対象としてのインド等の搾取型植民地、そしてそのあいだに位置したカナダ等

の移民型植民地（その多くが後に自治領化）にまたがって存在するイギリス帝国の様々な構成員——自分自身の帝国の領土内で重層的な支配／被支配の緊張関係を経験するかれらが、日本人による植民地支配と台湾人や朝鮮人によるそれへの抵抗に対しどのような見解をもち、行動したのか。

おわりに

最後に、駒込の研究が提起する歴史学論上の課題のひとつとして比較研究の問題に触れてこの文章を締めくくりたい。イギリス帝国という他帝国との同時代的な相互作用・影響の文脈において日本植民地主義を問うことは、日英をく比較する>ということとは似て非なるものである。むしろそれは、「西洋的」「アジア的」（さらにそのサブ・カテゴリーとしての「イギリス的」「日本的」）といった本質主義的な分類と、それらの単位に基づいた安易な比較論を相対化することにつながっていくことにその意義がある。では不用意な比較論の特に何が問題なのか。序章で触れられているように、駒込が特に不信感を抱いてきたのが、欧米の日本帝国史研究者の一部に見られる一種の日本特殊史観である。イギリスやフランスの植民地主義のあり方を標準とみなし、それからの差分によって日本の植民地支配を特徴づけるような歴史観である。暴力や排除の問題を天皇制やファシズムといったイギリスに不在で日本に固有とされるものに還元するだけでは、その初期においてイギリスの影響を強く受けた日本植民地主義の本質が掴めないばかりか、イギリス植民地主義への批判的視点が欠落しかねない。駒込が、「ラセンの上昇路」「公共圏」「全体主義」といったベネディクト・アンダーソン、ハンナ・アーレント、ユルゲン・ハーバーマスの欧米の理論家がそれぞれ提供する概念を、それらがヨーロッパ諸帝国の国民国家や植民地社会を念頭において編み出されてきたにもかかわらず、敢えて援用しながら日本植民地主義を論じるのにも、日本特殊史観に対する反発が背景にある。

この点に同意しつつ評者がこの場で補足したいのは、植民地主義をめぐる日欧の本質的差異を強調する比較論は、戦前の大アジア主義的な比較論理をも再生産しかねない危険性を孕んでいるとい

うことである。1930年代以降、日本の植民地支配の正当化は、それが欧米のもののように人種的分類に基づかないことを強調すること、そして、「非白人」であるアジア人の団結による「白人」を中心とした世界秩序への抵抗の手段としてそれを定義づけることによってなされた。以前であれば西欧との差異は「遅れ」や「欠如」として認識されていたが、その比較のフレームを温存したうえで今度は価値のみが転換され、日本による植民地支配の「優位性」を示すものとしてイデオロギー化されていたのである。間帝國的な視点は、比較主義的な思考法そのものが、互いの関係性のなかで成立・展開・変容していった近代の諸帝国の歴史的構成要素であったことを明らかにする。比較の罫に陥ることなく、イギリス帝国と日本帝国によるふたつの植民地主義をいわば「串刺し」で批判する必要を説く駒込は、本書において間帝國的な視点をとり入れることでそれを実践したといえる。日本の植民地主義の始まりと展開にイギリス帝国が密接なつながりを持ったことを示す駒込の研究は、イギリス帝国史研究者に大きな課題を突きつけている。植民地支配やそれへの抵抗は、ひとつの帝国内で完結するものではなかったが、それは日本帝国だけでなくイギリス帝国にも等しく当てはまる。イギリスが、そしてイギリスが支配したインドやエジプトなどが、日本帝国を含む他帝国における支配と抵抗にどのように関係したのか。それを今後明らかにしていくことはイギリス帝国史研究者の新たな役割である。